

第9期第2回府中市美術館運営協議会報告書

日時 平成29年8月5日(土) 午後2時～4時

場所 府中市美術館

出席者

委員(順不同・敬称略)

薩摩・谷矢・鷲尾・大杉・米谷・隠岐・馬場・吉田・畔上・石田・清水

事務局

藪野館長・須恵副館長・志賀副館長補佐兼学芸係長・尾崎管理係長・武居教育普及担当主査・原田事務職員

傍聴者 なし

内容

1 開会

(1)事務局職員紹介

2 府中市美術館運営協議会会長挨拶

3 府中市美術館館長挨拶

4 議題

(1)平成28年度及び平成29年度美術館の事業と運営について事務局より資料に沿って説明。

以下、 は各委員の発言、 は事務局

「(資料4について)無料の小中学生が多く、有料の小中学生が少ないのは何故か」

「府中市小中学生には「学びのパスポート」というものを交付しており、パスポートの提示をすることで無料観覧が可能です」

「では、この有料小中学生の数字は他市の子どものことか」

「そのとおりです」

「学びのパスポートは有料なのか」

「無料で配布しております。小学校入学時に全生徒に配布しておりますが、他市の小中学校に通っていても対象です。市内の博物館や美術館などでお渡ししております」

「夏休みにこれだけ来館者があるのなら良い制度だと思う」

「夏の展覧会につきましても、子どもは学びのパスポートを利用して保護者の方と一緒に来館されるというケースが多くなっております」

「配布した数はどれくらいか。配布した数の何パーセントが来館しているのか」

「正確な数はこちらでは把握しておりませんが、年間4,000ほどかと思えます」

「せっかく配布しているので、ぜひ活用して欲しい」

「資料4の中で、メンバーシップの利用者はどこに計上されているのか」

「有料一般に計上しております。」

「美術品の購入予算のつく年と、つかない年があるが、何か基準やルールがあるのか」

「毎年予算請求はしておりますが、市の財政状況もございまして、つく年とつかない年がございます」

「平成27年度に予算がついたのは、なにか理由があったのか」

「絵画購入の必要性を認めていただいた結果と思われまして」

「資料1の寄贈作品について、油絵と大雑把ではないか。何が寄贈されたのかをもっと詳しく知りたい。誰の作品がどのくらい入ったのかという情報など。他の美術館では「新寄贈作品」と書かれていたりして、それを見ると他の人も「私も寄贈しようかな」という気になるのではないかと。寄贈に関しては大々的に宣伝した方が良いと思う。それを貴重なものとして扱っているということを外にアピールした方が良いと思う。質問したいのは別のことになるが、企画展にはスポンサーはついているのか」

「当館の展覧会については、スポンサーという形ではありません。新聞社などと開催契約を結び、分担金を支払ってお願いするという形です。広報についても契約を結んだ上で行っております。巡回展では新聞社が主催しているものが多くありますが、立石鐵臣展も「夏のとことん！びじゅつじかん」も当館単独主催です。藤田嗣治展は東京新聞とNHKが主催に入っておりますが、広報広告については東京新聞と別途委託契約を結んでおります」

「ガラス絵展にも主催者が別にいるのか」

「ガラス絵展も当館単独開催の展覧会です。例えば地方の美術館などでは、その地方のテレビ局や新聞社と提携いたしますと、その地域への広告効果が非常に期待できるという強みがございます。当館のある府中の場合は、テレビも新聞も各社ございますのであえて1者のみと共催という形は取らず、新聞などでも公平にお取り扱いいただいております」

「凄いことだと思う。単独開催でここまで個性的な展覧会を開催できるのは、資料的な意味でもすばらしい。しかも、ガラス絵展もそうだが、新聞社のサポートのない展覧会では図録もそんなに売れないのではないかと。図録の発行

部数は年度毎予算で決まっているかと思うが、その点はどうなっているのか」

「図録の出版につきましては、最低ロットの1,000部から発行しております。何部売れるのかを予測するのは難しいのですが、入場者数を予測しそこから予想を行い、予算化を行っております。実際に展覧会が開催され、予測以上に来館者が増える事もあります。図録も売れていくのはありがたいことですが、公立美術館の弱みと申しますか、売れると分かっても増刷はできない状況にあります。まずは通信販売をお断りして、来館者を優先し、他館への寄贈分を極力削って販売に回しておりますが、それでも売切れてしまうということは多々ございます。昨年度は発行した図録が全て売り切れておりまして、大変ありがたいことなのですが、お客様のには残念なことと思います。最近では府中の図録は売り切れるから早めに行った方が良いというふうにも言われているとか」

「会期末にいくとまず手に入らないといわれている」

「予算的な対策を取ればと考えております」

「先ほどの寄贈作品の詳細につきまして、府中市では購入・寄贈予定の作品について年に1度府中市美術品収集選定委員会を開催し、修得する全点の作品について委員会に諮っております。昨年につきましては、都鳥英喜の作品をご遺族の方から6点、また牛島憲之と連動した展覧会を開催いたしまして、その時にご寄贈いただきました須田寿の作品4点、また市民の方より瑛久の写真作品を11点セットでご寄贈いただき、これは調査したところセット揃っているのは当館の他東京国立近代美術館に1セットしかない貴重なものです。その他、府中の市民グループである地域美術からは、戸嶋靖正、こちらは今年スペイン大使館でも展覧会が行われましたが、その戸嶋の若い頃の油彩画をご寄贈いただきました。そして、一昨年度開催いたしました若林奮の作品を、ご遺族から30点ほどご寄贈いただいております。こういったものは年報でご報告すべきものですが、当館は5年ごとの5年報になっており、毎年のお知らせが出来ず、先ほどご指摘いただいた点につきまして、迅速に明らかになっていないことは改善すべき点だと思っております」

「遺族の資料、写真や日記などもありえると思うが、それは点数に含むのか」

「作品点数には含みません。資料ということで作品とは別にお預かりしている場合もございます」

「公開制作で作られた作品というのは、こちらの所蔵になるのか」

「あくまで制作過程を展示しておりますので、作品となった場合には作家の所有となります。当館が所蔵したいという場合には、適正価格をもって購入する形をとるのが望ましいかと考えております」

「そのための購入予算がつかないということもあるということか」

「そのとおりです」

「先ほどのスポンサーについて。私は長く新聞社で働いていたが、新聞社は展覧会を事業としてやっているのだから儲からないことはしない。美術館が負担金を払い、新聞社が協力するという形が一般的。お金を出し合って成果も半分という実行委員会方式もある。先ほど言っていたスポンサーというのは展覧会では「協賛者」という意味かと思う。美術に興味があり、営利目的でなく費用を拠出してくれるという企業もある。新聞社が主催をすると他紙で取り上げてもらえないというデメリットがある。特定の新聞社とは組まない方が皆書いてくれるというのはその通りだと思う。マスメディアが美術展を開催するというのは、日本のとても独特なシステムで、ただ単にスポンサーをするというのではなく、新聞社が海外の美術展の窓口になっている。これだけ日本の美術展が普及したのは、明治期以降デパートや新聞社がこれまで頑張ってきたからだと思う。日本では国立の美術館は5館しかないし、地方美術館も、府中市美術館もまだ20年経っていない。日本経済がある程度余裕が出来てから各地方自治体が美術館を作り始めて、公立美術館で一番古い神奈川県立美術館も戦後からという状況。しかし今ではデパート業界が振るわなくなってしまうと、ほとんど美術展をやらなくなってしまった」

「基本的には文化事業の一環というイメージ。黒字にするはなかなか難しいのでは」

「新聞社もネット時代で新聞本体が苦しいから、事業で稼げというところもある。昔は利益よりも良いものを作れ、といわれたが。マスメディアと美術館の関係は難しいものがある」

「日本の展覧会のノウハウは、新聞社とデパートが作り、それを美術館が導入しているという感じ。江戸時代は豪商が文化のパトロンだったので、それをデパートは引き継いでいるから、単に商売だけでなく高級なものも取り扱う。新聞社の場合は、私見だが、やはり明治の自由民権運動と関係しているというか、明治の頃の新聞社は反政府的なところが非常に強い。しかしただ批判するだけでなく、政府や官僚がやらないようなことを自分たちがやってやろうという、そういう気概があって、政府官僚がやらないことという「文化」になる。スポーツも新聞社がなければ日本はとても現在のようにはならなかったと思う」

「新聞を読んでもらうために、美術館のチケットを配る。購読者の中に美術の好きな方がいるから、その方にチケットを配ると長く購読してくれる。スポーツも同じですが、そういうツールとして使ってきた」

「名古屋では新聞社が美術館を作るきっかけを作った。特に地方では新聞社の功も非常に大きいと思う」

「資料の中に、展覧会のカタログのデータがない。売上額までは必要ないと思うが、制作部数と何部売れたのか、売れ残ったのかというデータはあっても良いのではないかと思う。明らかにしない方が良いという習慣もあるのかもしれないし、寄贈者も名前をいわないで欲しいというものもあるのかもしれないが。持っていることが明らかにならない方が良いとか。けれどこれだけ頑張っただけでやってるんだということがデータで分かった方が良いと思う。新聞社にとっても良いのでは」

「それより単独開催の方が凄いことだと思う」

「確かにそれは誇りにするべき」

「美術館によっては、ほとんど新聞社が持ち込んだものをやっているところもある。」

「単独開催という凄いことをしているんだと、まず市の職員に知らせたい。それ自体が凄いこと。どこの助けも借りないで、これまで知られていない作家を掘り起こして。立石展の場合なんかまさにそうだ。絶対に宣伝していいことだと思う」

「最近、SNSで写真を撮って拡散していくということがものすごく行われていって、その良し悪しもあるだろうが、ただそれによって若者たちが大勢来たりするので、今まで広報活動だけだったのが、利用者間で広がっていくという形もある。府中市美術館ではそれはどのように考えているか」

「お客様からもよくご質問をいただきます。国立美術館で写真撮影を許可しているのになぜ市立美術館で禁止しているのか、という苦情をいただくこともあります。実際に国立美術館では許可しているものもあります。ただ当館としましては、現在のところ禁止しております。一部撮影可能な場所は設けようとは思っておりますが、そもそも携帯電話の使用を禁止しております。その理由としましては、日本のスマートフォンなどではカメラの撮影音がいたしません。撮影可能な展覧会を見に行くと、頻りに撮影音がしており、記念に撮るというよりは全編を取っていき、作品を見るというより撮影することに集中されているケースがあり、そのことが鑑賞環境の中では大変迷惑なことだと考えております。SNSの効果は期待したいところですが、まず地方美術館として市民の、子ども達にとっての美術館とはどういうところか。静かに絵と向き合う所だと教えたいという考えがございます。それなのに大人たちが撮影ばかりし

ていると、落ち着かないのではないかと思い、もう少しこのまま続けてまいりたく考えております。とはいえまったく全てが駄目というわけではなく、展示ごとにこの展示は良い、とか、この場所は良いとか、そういった形で対応できれば良いのではないかと考えております」

「これは各館がケースバイケースで決めていくしかないことだと思います。それでは次の議題に移りたいと思います。この委員会が査問されています20周年を迎える府中市美術館の運営について。平成32年度つまり東京オリンピックパラリンピックの年に開館20周年を迎えます。オリンピックはスポーツの祭典ということもありながらも、文化の祭典でもあり、この年は少なくとも東京の美術館、博物館は何らかの特別な活動を行うこととなっていますが、府中市美術館ではそれと20周年が重なっているというわけです。まずは20周年に向けて運営を見直す、あるいはこの先どのように運営し改善すべきところは改善し、新しい時代を、市民のニーズに沿った美術館にするのかということ等を皆で考えてきたいと思っております。美術館というのは常設展示があったり、企画展示があったり公開講座があったり、ハードそのものの運営やメンテナンスなど様々な問題がありますが、まずはあまり項目別にきちっと分けていくということではなく、自由な発言をいただきたいと思っております。まだ答申としてまとめるまで時間がありますので、美術館はこのままでいいのか、どこを改善したほうがいいのか、あるいは東京オリンピックのとき、20周年にはどんなことやったら面白いかに自由に発言をしていただきたいと思っております」

「周年事業としての予算はつくのか」

「市としての事業になりますので、予算請求の方法は例年通りとなりますが、魅力ある事業を提案し周年事業としての予算を確保できるよう努力いたします」

「方向性は決まっているのか」

「10周年の際には、所蔵作品をフランスのバルビゾンと連動させ、武蔵野の大地をフランスと繋げるという地域性に特化した展覧会を開催いたしました。20周年も府中市らしい当館のコレクションを活かしたものをつくるということも考えておりますが、市民に愛される美術館であるためにも、今後に期待感を高められる展覧会を企画できないかと考えております。当館の学芸員の人数も減員しており、展覧会の企画についても厳しい状況が続いておりますが、できるだけ自らで企画した展覧会を開催できるよう邁進してまいります。また、来年度につきましては、当館のエントランス等特定天井の改修が義務付けられており、その工事のために休館を余儀なくされております。休館の間に20周年の企画展について進めてまいる予定です。

「設備の方はどうなっているのか。20年というところそろそろ色々な箇所に不具合が出てくるのではないか」

「公立美術館ですと30年程で建て直しや空調取替えなどの工事のため休館が相次いでおりますが、当館でも空調の心臓部にあたる設備で大規模な修繕が必要になっております。また、天井の工事をしなければならない状況にあります。近年入場者数の増加率は好調なため、休館は館にとってのダメージが大きいです。休館の間にその他の不具合箇所についても併せて修繕等して、施設が長持ちするようにしてまいります」

「ぜひやるべきだ。どうせ休館するのであれば纏めるべき」

「抜本的に直すべきところは洗い出すべき。その間に、例えばソーラーパネルとつけるといったコストダウンのためのシステムを整えとか、そういうことはした方が将来的には良いのではないかと思う。予算請求をどんどんして、積極的に着けていくべき

「LED化とか」

「ライトはLEDにした方が良い。ハロゲンと消費電力を比べると10分の1ですむ」

「ハロゲンライトが発熱すると、それを冷却する空調費もかかってしまう」

「そのあたりもやはりちゃんとメンテナンスをして新しいものを入れ、20周年の企画展にもって行きたい」

「正面のエントランスが冬だとすごく暗い。ベンチも新調してもらえると良いと思う。あとはロンタンがなんとかならないのか、と」

「雰囲気はいいが、食べ物を電子レンジで温めて出すだけのわりにスタッフの人数が多いのが気になる。場所自体は外からも入りやすく雰囲気も凄く良い。ならばもっと個性的なメニューを出して、例えばぱれたんのライスを出すといった、そういうことのできる厨房にすればもう少し利用者も増えるのではないか」

「カフェの運営については変えられるのであれば言った方が良い。外のポスターやバナーも風で飛ばされたまま。いつでもかっこいい美術館であって欲しいと思う」

「私は開館した当初からメンバーシップ会員で、府中に美術館ができるということだけでワクワクしてきたが、最初の頃は借り物感がしていて、これで大丈夫なのかとっていた。しかし10周年で武蔵野とバルビゾンを開催して、また開館の時とは違うワクワクを感じた。ここ数年でまた府中市美術館は変わったと思う。これまで遠慮気味だったものから、一步前を出して作家に合わせた展示のつくりというか雰囲気を出すものになってきていると思う。府中市美術館の知名度が上がってきたのもその結果ではないか。

ただ他の美術館では、足を踏み入れた時にそれぞれの雰囲気があり、展示会の世界に入るが、府中市美術館にはそれが足りないように思う。せっかく改修をするのなら、2階に上がるときにもっとワクワクときらめくようなものにできないか。今日見たばれたんの展示会では、来館していた子ども達やその親がとても楽しそうにしていた。この子どもたちが大きくなったら、また府中市美術館に来たくなるような、オープンな雰囲気が出せると良いのではないか」

「設備のことや、ソフト的なことでも何か自由なご意見をどうぞ」

「この前吉祥寺に行ったら、武蔵野市長がアールブリュットの展示会のイベントを行っていて、市の関係者や美術館以外の人も参加して、市全体で確立してオリンピックイヤーまで続けようという市長の意向が反映されて動いているという話を聞いた。そのような話は府中市ではないのか。美術館があるし、市の方でこれを活かして何かしようという動きがあって、予算がついてくると良いのだが。なにかそういう情報はあるのか。無ければ美術館でそういう動きを作る必要があるのではないか」

「府中市美術館の取組としては、近隣美術館との連携事業を今年度より始めております。今年度は小金井市のはげの森美術館と、調布の武者小路実篤記念館の3館ですが、来年度以降連携を強化拡大していければと考えております。オリンピックパラリンピックに向けてもこの近隣館のネットワークでなにかできないかと思っております。

「もう3年後。3年で本格的にやろうしたら、もうある程度考えておかないといけない。やはり本来の良い展示会をやるというのが問題で、予算もつけてやっていただきたい。それとは別に、市民が参加できる市民作品展や写真展などを実施してみるのも良いかもしれないが、よくある手ではある」

「20周年とオリンピックが重なるということは、府中の森全体が何かしようという話になるのでは。その中の一つという連携も重要だと思う。府中市美術館だけ20周年だからと別のことをしていると浮くのではないか。また、公園のエリアも上手く利用して、外でティータイムができるとか、ゆっくりできるものがあると良い。現状のエリアではゆっくりできないし、外のベンチも古くなっているなのでその当たりが改修されると良い」

「カフェの前の小山で見えなくなっている。あの部分も全て座席にしてしまうのはどうか」

「スポーツをやっている人もいっぱいいて、昼食に利用してもらえるかもしれない」

「もう少し気軽な形にして、皆が利用できる食事コーナーもあると良い」

「弁当を食べられるところがあると良い」

「食の場合、業者をいれる問題があるので、方針だけは先に決めておかないと、急には無理だと思う。そういった拡張予算が、修復だけでなく増額が可能かというのは本当に予算次第だろう。オリンピックに関係させていければ補助金も期待できるのではないかと。可能であれば世界発信、という側面を持たせるとオリンピックに関連した集客も出来るのではないかと思う。地方美術館も国際的に繋がっているというアピールにもなる。今日観覧した感想だが、子ども向け展示といっても、質の高い本物の江戸絵画がある。また所蔵作品にもファンタスティックな感じの動物や人間のようなものも集まっているように思う。所蔵品でテーマを変えた展覧会が開催できるほど点数がある、ということを実際に示しているのだから、それを海外に向けてアピールすればよいのではないかと。その場合は英語での発信が必須になる。市民のための美術館も良いが、それとは別に世界に繋がるということ意識した展覧会を開催しても、面白いのではないかと」

「今は学校でもICTを利用している。美術館でも作品を見せるだけでなく、別のやり方があってもよいのではないかと思う。今の展覧会で作品がケースに入っていてよく見えず、レンズがあったがそれでもよく見えない部分もあった。

ライオンバス（来館者の描いた作品を並べるスペースを設け、そこにカメラを走らせて撮影した映像を、バスを模したディスプレイの窓越しに映し出す。来館者がサファリバスに座って自分の制作したいいきものの絵を見ることが出来るもの）のように小物を使ったり絵の中に入るようなシステムといったものが、今後の美術館を考えた時、先を見通して利用できる施設になるのではないかと思う。学校も授業を黒板とチョークだけで行うのではなく、ICTを利用してより興味を持たせたりしているので、同じような事を美術館でもできるのではないかと感じた」

「現在映像関連のものがいろんなところで出てきている。子どもたちが今後大きくなっていくと、これまでの絵画の世界から映像関係が出てくると思う。その時に府中市美術館としてどう対応するのかを考えなければいけない。指導要領でも映像を導入しようという動きも出ているので、今後は映像がスタンダードになってくるのではないかと思う。そういうことについて府中市美術館としてどう対応していくのかを考える必要はあるのではないかと」

「最近ではデジタル技術を活用した展覧会も多い。先日観覧した浮世絵の展覧会では、来館者の動きに合わせて目が動く美人図があった。その他に、アルチンボルト展でも、顔に合わせて果物や果実で肖像画を作ってくれて撮影できるコーナーがあった。そういった今の時代ならではの面白さもある。ここの収蔵

作品を使ってそういったアトラクショナルなものも視野に入れるべきなのではないか」

「デジタルで作品を展示するには4 K、8 Kといった高解像度の画像が必要になる。4 Kの天井画を見たことがあるが、拡大して細かなところを見ていくと、筆の動きや波線まで全部見える。そういうことが出来る時代だからこそ、逆にマニアックな部分をやってもかまわないと私は思う」

「学芸員が補充できるなら、そこに強い人とか。自前でもやれる時代になっている」

「美術館としての本道は忘れてはいけないと思う。アトラクションセンターでは困るので、そこはきちんと押さえた上で、どう演出をかけていくかということだと思う。特に複製、いわゆる映像の技術が飛躍的に進歩しているので、そのあたりを展示の中でどう取り扱っていくかを考えるべきだろう。話が変わるが、京王バスのバス停を「府中市美術館前」と変更することはできないのか」

「ちゅうバスのバス停名称も当初は違う物でしたが、現在は美術館前となっており、バスターミナルでも多磨町ルートの案内に「府中市美術館経由」と表記されるようになっております。予算がつけば車内アナウンスで府中市美術館の名称を流していきたいと思っておりますが、なかなか実施できない状況でございます」

「京王線や小田急線の「よみうりランド」駅も最初からそうだったわけではない。ああいったものは市長クラスが言わないと変わっていかないのではないか」

「美術館のホームページを見ると国道20号からのルートがあるが、途中途中で看板をつけて欲しい」

「世田谷美術館は環八の歩道橋に横断幕がかかっている。道路に看板を設置するのは難しいかもしれないが、横断幕は警察に許可を貰えばできる」

「府中市美術館でもアンケートを取っていると思うが、そのアンケートについてどう対応しているのか気になる。修繕に係ることや、市民との協働の活動に対しても何か役に立つ意見が出ているのではないか。私もアンケートを時々書くが、書きにくい」

「具体的にどのようなところが書きにくいでしょうか」

「年齢とか」

「ネット上でアンケートは取れないのか」

「アンケートボックスの場所を増やすのが一番楽なのではないか」

「平塚市美術館に行ったとき、入り口に封筒が置いてあり「美術館長へのお手紙」と書いてあった。封筒の中はアンケートが入っており、アンケートの最

後に「個別回答の要不要」を記入する欄があった。個別に回答を希望する人に対しては宛先へ送付するのだらうと思う。そういう形式でもよいのではないか。あとは駐車場のスペースを増やして欲しい。十分な駐車スペースがあれば、少しはなれたところからの方も来館しやすいのではないか」

「基地跡地については美術館からも要望は提出しております」

「20年ということを気にせず他にご要望があればどうぞ」

「海外みたいに駅前にレンタル自転車があって、府中の施設に行けるというものが広まると良い。府中市美術館のキャッチフレーズもあると良い」

「府中の森全体のデザインの見直しをしても良いかもしれない。開園当初と人の流れも変わっているかもしれないので」

「レンタル自転車の話だが、デンマークでは駅前や美術館の周りにレンタル自転車のスタンドがある。初期投資は必要だが、実際に実施している都市もあるので府中市美術館も参考にしたい」

「美術館として長いスパンでの将来像というのは持っているのか」

「色々なアイデアはございますが、公立直営の美術館として基礎を踏み固めるということが特徴になるのではないかと考えております。その基礎になるのはやはり作品収集です。現在購入予算がついていないのは残念なことです。購入を勧めながらコレクションを延ばしていき、100年美術館と申しますか、100年後に市民美術館として充実した物に発展するため、よい展覧会を開催し、名作品を収集していき、落ち着いた鑑賞空間の中で提供していくといったことを進めてまいりたいと考えております。また、先ほどお話もありました映像や新しい美術ジャンルという物も適切に取り入れながら、次の世代を担う子ども達に新しい美的感覚や想像力を育んでもらう場を提供するためにはどうしたら良いのかを考える必要もございます。そのためには、アンケートなどを活用し広く市民の皆様のご意見を参考に、真摯に取り組めるシステム作りも重要だと感じております。作品を中心に人と場を結んでこのまちの宝になるように、美術鑑賞者のためだけでなく、市民生活を営む全ての人に対して、このまちに暮らす喜びというものが伝わる美術館を目指したいと思っております。

「ありがとうございます。そろそろ時間もちょうど良いので、本日はここまでとさせていただきます。次回は12月頃開催ということで、また皆さんよろしく願いいたします」